

## 住環境教育に関する基礎研究 (その2) 体験学習を通じた人間学的空間生成の考察

正会員      ○後藤さゆり\*  
同              在塚 礼子\*\*

住環境教育      体験学習      人間学的空間      主体性

### 1. 研究の目的

住環境教育では、人間性によって構築されている空間を認識の基点に置き、住環境に対する価値観の再構築を試みる必要があると考える。既に本研究では、記憶による空間は二元的視点で認識されているのではなく、遊びなどの行為や五感といった人間性を通じた一元的視点で構築されていることを明らかにした<sup>1)</sup>。本稿での人間学的空間とは、人間が自らの体験を通して身体的・主観的に認識する空間を指し、客観的に捉える物理的な空間の認識とは異なる要素で構成される。

そこで、本稿では大学キャンパス内の空き地の改善という行為を通じ、自らの手で住環境を変化させることにより、住環境に対する認識が二元的視点だけでなく一元的視点へ広がるという仮説に基づいて、空間に対する認識と体験の関わりを明らかにし、考察を加える。

### 2. 研究の方法

調査対象は埼玉大学学生の男女 85 名で、調査時期は 2001 年 11 月から 2002 年 2 月である。資料には、学習の事前事後に実施したアンケートおよび学習の途中で作成したレポートを用いた。

### 3. 実践した空き地の概要

校庭改良を実践した場所は、教育学部棟の間に挟まれた幅約 65m、奥行き約 30m の棟跡地であり、土には瓦礫が埋まった雑草の生い茂る空き地である。構内のメインストリートにも面していないため、教育学部の学生にとってもあまり馴染みがない。一方、その場所を緑化し、大学での生活の場として利用されることを目的に 3 年半前から活動している団体がある。また、昨年度の学習により間伐材を利用したベンチが 6 脚、団体の活動によりテーブル 1 脚と小さな花壇がある。昨年春はクローバーの種がまかれ春から夏にかけては一面クローバーの緑で覆われた。この学習では、この場所を空き地、クローバー広場と表現している。

### 4. 学習前の空き地に対する認識

緑の多い場所、のどか、季節を感じると答えた学生が約 30%、昼食をとる、友達と話す、運動をする場所と答えた学生が 15%いた一方、無駄、有効活用されていない、認知度が低いと答えた学生が 35%、通るだけ、無関心と答えた学生が 20%に上った。空き地の存在を知り、その良い面を評価した学生でも、自分がその場で過ごすなど活用した経験のある学

生はごく一部であり、空き地は学生にとって身近な存在になっていない。また、空き地の変化については、ベンチ等が置かれたことによって人の気配がするようになった、以前よりは居心地がよさそうになったとその変化に気づいた学生より、変わらない、知らないと答えた学生の方が多く、空き地に対する関心の低さを示す結果であった。学生は、大学という場を講義を受ける場、サークル活動をする場というように目的で認識しており、その空間や時間をつなぐ場の必要性、重要性に気づいていない。また、大学のキャンパス内には学生の居場所として計画されている場所が少ない。

### 5. 空き地の改善計画・実践のプロセス

No.	月.日	学習内容
1		大学構内のイメージマップ作成
2	11.19	事前調査
3		レポート作成 課題「空き地を捉える」
4	12.3	レポート発表・改善の課題別グループ作り
5	12.10	グループ別、空き地の改善案作り
6	12.17	改善案の発表・検討・作業グループ作り
7		レポート作成 課題「具体案の計画」
8	1.7	グループ別、具体案の検討 具体案の発表・全体討議
9		代表者会議・買い物
10	1.21,28	作業
11	2.4	作業・まとめ
12		事後調査

#### (1) 空き地の改善案作り (No. 3～6)

まず、学生に空き地の実態を捉えさせるためのレポートを課した。学生は、どのような樹木、草花がどのように配置されているか、どのような利用のされ方をしているかなど、自分の興味に従って観察を行った。次に、そのレポートを数人に発表してもらい、改善に向けての課題(季節の変化、生き物との共生、植物に関心を持つ、人の集まり、人の流れ、土の感触、リラックス、駐車場問題)毎にグループディスカッションを行い、改善案を提案した。提案の中で有効なもの、自分たちの力だけで実践が可能なるものを抽出し、具体的作業グループ(花壇、植樹、草木のネームプレート、歩道、バードフィーダー、掲示板、地面の整備)に分かれた。

#### (2) 具体案の作成・実践 (No. 7～12)

個々人で具体的なテーマに沿ってどのような改善をすれば

よいか、参考になる場所を訪れたり資料で調べたりしてレポートを作成し、それを基にグループ案を作成した。

この学習では、空き地の改善計画を通して人間と空間との関係についての認識を深めるため、学生が計画・実践というプロセスを踏むことを重視した。そのため、計画段階における空間をデザインするための十分な話し合いの時間が持たないこと、実践にかけられる時間が4時間と短いこと、季節が冬であること、グループの人数が多いことという制約される条件が厳しい中での実践であった。

## 6. 学習後の空き地に対する認識の変容

多くの学生にとって、空き地は身近ではなく、使用目的の明確でない、無用な空間に感じられていたが、何度も足を運び、自らの手で簡単な改良を加えたことで、空き地に対する親密度が増した。体験学習によって身体を通して認識した空き地は、対象として客観的に捉えていた空間とは異なり、人間との関係によって動的に存在する空間として認識されている。(以下は学生による記述)

・今までは、自分たちとは無関係で遠くに感じていたものが、今回の活動を通して「自分たちで創り上げた場」として、自分にとっても身近な「愛着のわく場」となった。

・今回の授業を受けて、初めてこのクローバー広場を空地という貴重な空間として認識した。空き地は、全ての人に開けていて、どのような仕様も受け入れてくれる。また、その無目的っぽさが日常にぽっかり空いたのんびりとした空間を生んでいる。そして、今回の授業のようにまだまだ人の手を加えて充実したものになる可能性がある。動く、生きた空間である。(以下は学生による記述)

・クローバー広場は創造の場なんだなあと感じた。人が知恵や考えを集め、よりよい場をつくっていかうとする一つの例だと思う。そこに居る人によって広場はさまざまな型を形成し、個人個人の個性がそこに現れると思う。

・さまざまな活動に取り組むために何度も足を運ぶうちに、空き地がどのように利用されているかもわかったし、どう改善していくべきかというようなことも見えてきた気がした。クローバー広場の意味は、刻々変わっていくのではないかと考えるようになった。自分の持っていた空き地の意味とは異なった意見をもっている人にたくさん出会ったからである。

・今まで自分の生活とは全く関係なかったのに、急に、「あそこでご飯を食べようかな」とか「もっと人が集まれば良いのにな」と考えたりするようになりました。これが、教室の中でただ想像だけで話し合いをしたとしたら、このように感じることはあまりなかったような気がします。

## 7. 学習後の住環境に対する認識の変容

空間が人間と相互浸透的に存在するという気づきは、人間学的空間の生成を意味している。この人間と空間の相互浸透的關係は、客体としてある空間を自己の身体の延長としてある空間に重ねて認識することによって成立している。これにより、「人の匂い」や自分がその場を変えようという意志を空間が変化する要因として捉えることが可能となる。そして、

この空間の変化という実感が、住環境に対して主体的であることの意味に気づかせている。(以下は学生による記述)

・今まで自分は住環境に対して受身的で、今ある環境を受け入れるということしかしてこなかった気がする。そして、それをあたりまえのものだと何も感じなかったり、時々小さな不都合や不満を感じても、何も積極的に働きかけようとはしてこなかった。しかし、今回の活動を通して、いくらでもその場は自分にとって豊かで生き生きとした魅力的な空間、住環境にしていくことができるのだということに気づいた。

・人間と住環境は相互関係的であり、人間が願いを込めて創り上げることによってより豊かで魅力的な住環境が実現し、そこで暮らし生きる人々もまた、より快適に豊かに生きていくことができ、お互いを高めていくことができる関係だと思った。

・住環境とは家のことばかりだと思っていたが、人間が暮らしている空間そのものが住環境であると知った。人間は自然を破壊し、人間が住むための空間を作っているけれど、本当に必要なのは自然と人間が共存、共有する環境ではないかと改めて思った。

・以前は、魅力的な住環境とは、整備され、人工的な美しさがあり、とても便利な工夫がたくさんされているような場所、またはその正反対で、人間の手が全くつけられていないような自然のありのままの姿が残っているような場所、のどちらかだと思っていました。しかし、今回クローバー広場改善計画を立てていく上で、その意識はとても狭いものだという事に気づきました。というのは、自分が魅力的だと思える場づくりをしようとする、その時点で、その場所がすでに自分にとって魅力的なものになっていたのです。

・人に管理された空間は親しみやすいと思うようになった。管理された形跡はそこに人がいた形跡であり、そこを訪れた人は無意識のうちに形跡を残していった人と空間を共有しているということを感じ取って安心を覚えるのではないだろうか。これまでは、住環境という機能のことしか考えてこなかったが、機能以外にも「人の匂い」に配慮できるようになったのではないだろうか。住むという事が自発的で積極的な行為であるように思えたのもこの活動を通してである。

・人から与えられた場所よりも、自分で作った場所のほうが魅力的だと思う。外から見ていた環境と内から見ていた環境が全く違うということに気づいた。

・人は大地で暮らしているということを忘れてはいけないと思った。

## 8. まとめ

体験学習が人間学的空間の生成を促すこと、人間学的空間では、合理目的価値以外の価値が創出されること、住むという行為は住環境に対して主体的・能動的行為であり、人間には環境をより豊かに変えていける力があることを実感させる効果があることを明らかにした。

<sup>1</sup> 後藤さゆり、在塚礼子:住環境教育に関する基礎研究 記憶に残る場所から見た人間学的空間の考察、日本建築学会大会梗概集 2001年

\*東京学芸大学連合大学院 (博士課程)

\*\*埼玉大学教授・工博

\*Graduate School, Tokyo Gakugei Univ.

\*\*Prof., Saitama Univ., Dr.Eng